

あねもねの花崩れ散り紅くれなるの花片敷けり其根の上はなびらに

過ぎにしは殆ほとほと忘れ生ける身に忘わすれ勿なご草の花咲き
にけり

忘れにし今を嬉しとすならねど忘れずあらば
生くべしや身は

忘るなと薄紫に咲き出でしあえかなる花咲き
て散りにき

ぜらにうむ其紅くれなるを美しめ心置かれて手は觸り
かねつ

真白なるこの小草花こむすぶなことわきて我が眼ひくな
り涼しきからに

畑の中道

岡の上の並木の椿春風に暗き光となりて亂る

春の風吹きや過ぎ行く麥畑青き光の此所には
落つる

廢園

三木露風君と郊外の廢園に遊ぶ。

人いれぬ廢園の奥に春の草青く繁りて皆花を
持てり

廢園に繁り續ける熊笹に春のひかりのさし來
て亂る

常盤木は枝さしかはし深き蔭つくりて續く今日
の春日に

若葉せる楓木垂れて行く路を立ち塞ぎたり日
に照りつつも

出でて來し杜の樹立に春の日は紅くさしたり
返り見すれば

初 夏

物や置くと^{まぶた}瞼重きにとの曇り空は雲白く^{かがよ}耀へ
るかも

との曇り空は白さに^{みづえ}瑞枝さし若葉の楓かがや
き立てり

子と居りて

錢湯に子を連れ來り小き背せを洗ひやりつつあ
はれとは見る

子が爪の伸びし切りつつその悪しき形直らぬ
をあはれみにけり

この心汲めと望まね汲み知らば嬉しからむと
我が子を見つも

いつの間まに覺えやしけむ阿あをしつつもの云ふ
子となりしかも

伴ひて遊びに行けとせむる子に云うて聞かせ
つえ行かぬ由を

心なく云ふらむ事も其親は心して聞く愛しき
子故

我が見てし悲しき夢を時の來ば此子も見らむ
めぐしかれども

縁ありて親とはなれり然れどもかかはり難し
子が持つ心

富士の山

大塚に電車下るれば、我れ待ちて立てる童、相並び
坂行きつつも、矜りかに我れに云ふらく、我はも今
日此所の坂にて、富士の山初めて見けり、眞白くも
彼方の空に見えけりと指ざし云ひて、今も猶見む
と思ふや、伸び上り其方は見れど、夜の空の暗さに
隠れ、其山は全し見えず、初めても見て驚ける、子が
胸に映りや居らむ富士の山はも。

富士の山初めて見ては驚ける我が子が心羨し
 きろかも

鎌倉懐古

鎌倉の幕府は何所、將軍の營所は何ら。朝日照る東
 御門に、麥の芽の芽生は青く、夕日照る西御門には、
 赤土の畝こそ續け。春の風海より吹くに、土埃軽く
 舞ひ立ち、照れる日に見えて漂ふ此跡所

武士の亡びし跡の寂しさにまされるはなし残
 る物の無き

貧窮

食はざれば餓うる身をもて世に生まれ食ふべき物持たぬ我れかも

身に持てる如何なる物も賣らむとは思へ賣り得る物や何物

此心枉げじと思ふ矜すら餓は悲しもとすれば棄つる

歌詠みて米に換ふるは爪をもて集め箕をもて零すが如き

我が心言葉とすれど其言葉人の愛無く價は持たぬ

我が心此一事ひとことに注ぎては十年とせ惱めど歌に價無
き

聊かたの金かねなりながらたまたまに得て持つ金かねの憎
からなくに

金かね得るは難くやあらむ人皆の得まく欲りして
競へる見れば

金かねあれど無きが如くにする人を尊しと見る金かね
無き我れは

金かね持つを羨まねども我が友はおほむね貧し且
や美む

我が心枉げ難しとし思ひ入りしくしく金かねの尊
き思ふ

價無き物とし思へ歌詠むに今宵もいたく更け
にけらしな

貧しきに我れは勝ちたり今もはた貧しかれど
も其事忘る

氣にかかる事の數多^{あまた}は持たじとぞ思ひけるよ
りいよよ貧しき

貧しさを忘るるべくも書讀^{よみ}むにあらね貧しさ
忘れたりける

富人^{とみびと}に生まれたりせばこの心持たざりけらし
持つ尊まむ

守るべき物を持たねばうつたへに我は守れり
この我が心

貧しくて生くは難しとすら若き心に聞きてお
それたりける

賢しと思はぬ人に心殺し仕へゆくよは貧しく
を居む

逢ふ人のいやしき見つつさも無げに笑ひはえ
ずば巷に出でそ

いかならむ境におくもこの心損そこなはじとは頼め
難なく

雛買はむ金なしと子に云はむよはさぶしき堪
へて歌や賣りなむ

我が歌を金に換へけり歌詠まぬ誰かは知らむ
このさぶしさを

貧しさに侘ぶる心をたまたまに胸に持ちつつ
幼きと居る

貧しさに堪へつつ生きて久しけど我が心いま
だ瘦せしと思はなく

富むべくは卑しき職も我がせむといひし聖人
の心思ほゆ

若かりし日を思ひ出でて

此を持ちて世にし立たむとたのむもの有るべ
かしきにあらぬ我かも

高き才この身になしと今を知りながす涙を親
はしらじな

今よりは我れ師となりて世に生くる術教へむ
と父はいはすも

生れつき異なる才さいを持たざらば學びの道にむ
かふな我が子

貧しさのこの嘆き子にはさせまじと雄心こころあさ
へ田作れり我は

その身だに修むるをえば學ばずも學びたりと
し孔子くしも云ひにき

譽ある家には生まれ貧しさを知らざるからの
心つつしめ

あはれみを御眼みまにうかめて我を見つ生き難き
世ぞと父はいはすも

愛しげに我を見つのも此を見よと節高き指を
示しませり父は

四人子の三人身をかたむ氣がかりはをとの子
汝と母の嘆かす

野ら爲事汝に強ひては焦るらむ兄をや見むと
母は嘆くも

屑繭の絲あまたありことごとく汝に著せむと
母いひますも

いかなればただ一人我のさみしきや夕食うれ
しみ食ぶる家びと

さみしさの襲ふをおそれ暫くの程だに文は放
ちはかねつ

さみしさのまぎるるべくは肥桶のきたなき擔
ぎ畑にも行かむ

さみしさの切なかれども稻十たび刈るに老ゆ
らむ安さ我がせじ

秋の日の黄に照るひかり庭照らし土にしみ入
るに落つる涙か

ここにしておかくし湛へて池水の流れず澄むに
さみしくや見ゆ

形見にと父母の寫眞わが盗み隠すところ無み
床の下におく

ここにしておかくし復は寝ねじと青蠅の古りて黒さを
灯かげには見つ

水の音あやしく高しをさなきゆかくし高きは
聞かざりしかも

いつか復かくは膳並べ父母と飯は食べむとこ
ころ嘆きつ

隣村の友がりゆくところわるに誠かと問はす
母の悲しも

我を見てものいはぬ母はうれはしさ堪ふるに
餘り涙こぼさす

さいはひの人と云はれて今は老いしこのふた
親にうれへあらすな

稻倉の峻しき山路のぼりつつ青草の上に汗こ
ぼしたり

信濃の人々を思うて

みづからが心の儘に振舞ひて人と謀らぬ信濃
人かも

八谿蔽ひ立つや杉の木己がじし立ちて同ぜぬ
信濃人かも

檀の實の一人居りつつ友無きを愁とはせぬ信
濃人かも

涙はも胸に堪ふれ人の目に見えて零さぬ信濃
人かも

思ひ立つに人言聞かぬ信濃人よしや斃るも本
意に向はむ

土を眺めて終

卷末に

自分はこれまで歌集を公にする毎に、記念の爲に、その歌の出来た背景を、序として書き添へておくのを例として来た。それに倣つて此歌集にも序を添へようと思ふのであるが、これに限つては、言ふ所を知らないと思ふのである。かうして幾何の歌を詠んで、集にまでしたのであるが、しかも自分はまだ、これらの歌を詠んだ境涯を支配し切る事ができずに居るからである。

此集にをさめてある歌は、大正六年の春から七年の春までの一年間の自分の生活の一部を詠んだものである。六

年の春、自分は思ひがけなく妻の死に逢つた。幼弱の者を亡妻の両親に托して信濃へ遣つた後、自分は神田の旅舎に身を置いて、その者等の爲に母の傳記を書いて置かうとした。暫くすると自分は東京を離れ得る境遇となつたので、自分に取つても郷里である信濃へ行つて、其事を果す爲に一夏を過した。秋になつて東京へ歸つて本郷の下宿に住み、冬に入つて雑司ヶ谷に住む事となり、それと共に一人の子供と眠食を共にするやうになつた。そして今一人の子の歸京するのを待ちつつも其年を送つた。

その一年足らずのあひだ、自分は殆ど歌を詠むことができなかった。自分に取つては、歌は最も親しみあるものであるにもかゝらず、自分はそれをさへも奪はれた状態であ

過したのであつた。年を越えると、漸く自分は歌を詠みたい心となつた、そして二三が月のあひだ、暇を得るがままに詠んだのが此集の歌である。心を盡し得ぬ憾みは持ちながら、自分としてはそれをする事によつて、捉へられてゐる境涯から、多少なりとも脱れ得る事のできる歡びを感じつつ詠み耽つたものであつた。

校正に際して今一度靜かにそれらの歌を讀み返しつつ、自分は我が心の未熟と痴愚に對して憤りを感じ、故人に對して恥を感じずには居られなかつた。しかし此等の歌と別れ去るといふ事は、自分に取つてはやがてこの心を新しくして行く所以で、忍んでも爲なくてはならない事である。これを、かうして集とする事のできたのは、一に詞友四海

多實三、森園天淚兩君の厚意によつてである。ここに記して深き謝意を表する。

大正七年初秋、校正の終つた日に

窪田空穂

大正七年十二月十五日印刷
大正七年十二月十八日發行

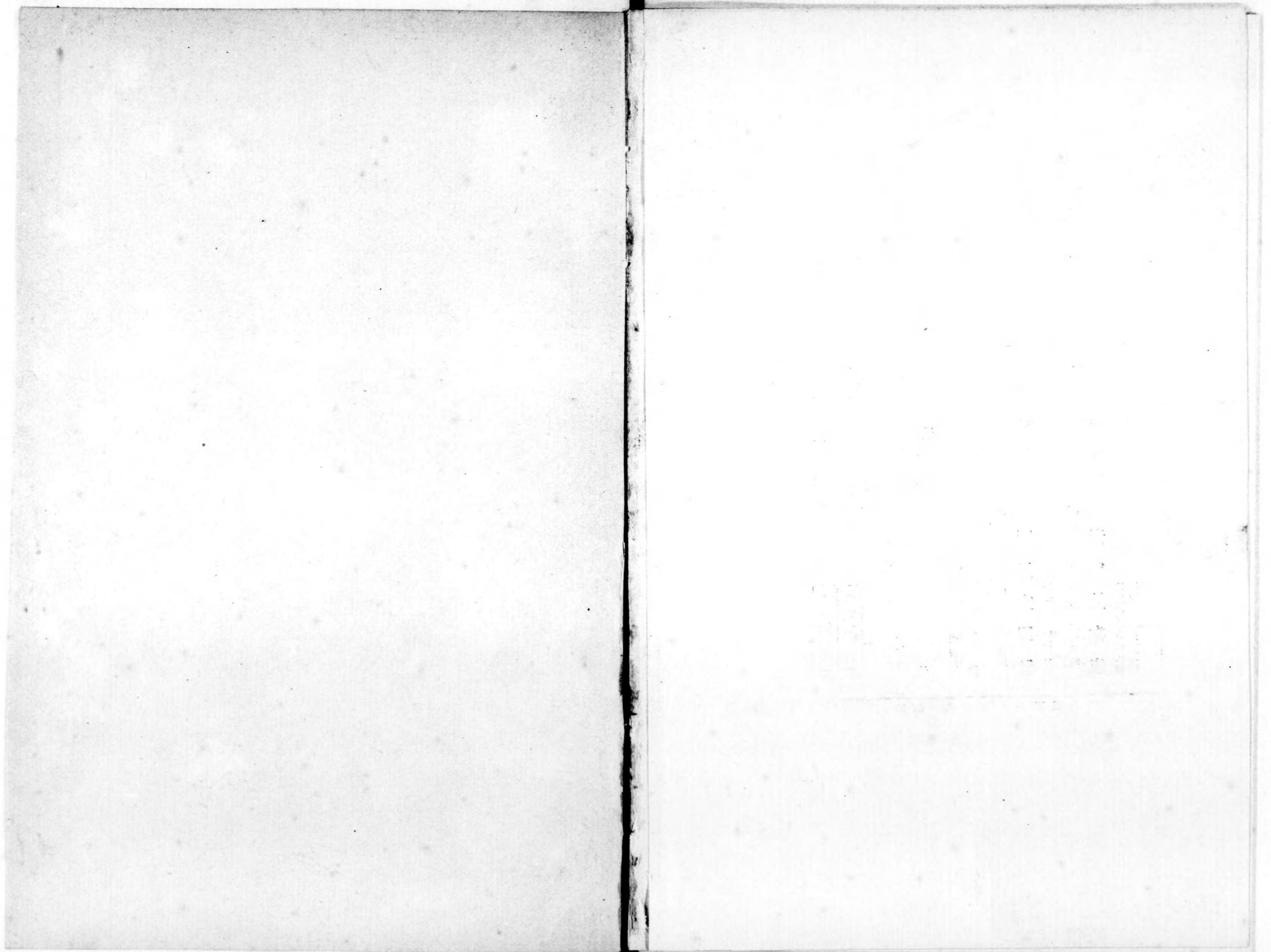
土を眺めて
定價金壹圓

著者兼發行者 窪田通治
東京府北豊島郡雑司ヶ谷村四一七番地

印刷者 久保田志朗
東京市神田區裏神保町六番地

發行所 國民文學社
東京市小石川區大塚坂下町八十二番地
振替東京二四九〇三番

發賣所 光風館書店
東京市神田區裏神保町六番地
電話本局二〇三九番
振替口座東京三二七番



277
898

終

